

第2回「新・京都市産業振興ビジョン(仮称)」策定検討委員会 発言要旨の整理

(平成 22 年1月 27 日(水) 京都ロイヤルホテル&スパ)

テーマ	主な発言の概要
京都の産業の 現状認識	●京都の強み - 映像学部は東京の六大学等でも検討されていたが、立命館大学だけが設立にこぎつけられた。太秦の映画産業や任天堂等の京都のコンテンツを作り上げる力が背景にはある。 - 京都の外にいたとき、先進事例の視察先には必ず京都があがっていた。ベンチャー支援、大学間の連携等、新しいものは京都から発信されるという認識を持っていた。歴史に培われた文化・知の集積があり、都市規模も小さくなく、かといって大き過ぎず、連携を取りやすい規模だからではないか。 - 人口 146 万の大都市でありながら、都市内の移動効率が非常に良い。文化・歴史・大学の集積も厚く、面積当たりの情報量や付加価値が非常に高いのではないか。 ●産業発展の基盤を支える産業の衰退・人材の不足 - 京都で就職をしたいという学生は多いが、就職先が少ない。また、部会でも議論されたような「見えないバリア」が確かにある。
検討の方向性	●市場の変化への対応(環境) 「環境、低炭素社会がビジネスチャンス」と捉えた時、そのための技術を生み出すというよりも、低炭素社会に向かう時に社会システムがどう変化するか、その時に生まれるビジネスチャンスとは何か、と視野を広げて考えることが重要。 - 環境分野で期待される電気自動車の要素技術、電池・モータ・インバータ・コンバータ等はすべて京都の企業が持っている。 ●人材育成・確保 - 日本はこれまでクリエイティブな各職業の育成をしてこなかった。また、海外から科学者、金融関係者、クリエイター等を招へいすることも無かった。幅広い人材を受け入れなければ都市の発展はない。 - 京都にはインターナショナルスクールが無い。京都の大学に海外の研究者がきても、家族を連れて来られない。子どもが成長すると帰国せざるを得ない。 - 最近では女性が伝統産業を学び継承するケースも増えている。女性がもっと活躍できる環境を作る必要がある。 - 若い世代の人材育成を進めるとともに、シニア層が民間・行政でキャリアを活かす、また学会と経済界の人材交流を進める必要がある。 ●インフラ整備 - 関西空港は貨物面でも便数が減り、成田を経由せざるを得ず、コストに響く。関西空港の活用強化を望む。 ●事業用地の確保 - 町並みを保全すべき地域と、それ以外の地域とを整理し、住宅・工場誘致について規制を緩和できるところは緩和して、人と工場を呼び込むべきではないか。(例えば南部や山科など) ●資金の確保・循環 - 外部から見て魅力的な経済活動がなされ、投資が集まるようにしていく必要がある。

テーマ	主な発言の概要
	●伝統産業 ・ ブランドを支えている一端には、京都の伝統的なものづくり産業がある。 ●広域的視点 ・ 京都市と周辺都市、関西、日本、世界との関係性を視野に入れながら考えていくことが重要。 ・ 京都の未来を考えることで日本・世界のモデルをつくる、といったビジョンを出す。 ・ 京都だけが生き残るのではなく、成功例が全国・海外に発信される、外部経済を持つようなビジョンづくりが必要。 ●ベンチャー企業の育成 ・ 京都の活力の一つである学生がビジネスを展開するのはなかなか大変で経済的にも不安定。どのように支援しながら彼らの創造性を引き出すか。 ●財源確保 ・ 産業を振興し、雇用を生み、税収を確保する。最も現実的で本質的なこの視点を欠いてはならない。